

一 下馬の法度背バ、四度、中老ハ可爲小科、四度以下の者ハ一ヶ月裝束可押事、但高官の人ハ請暇落ニ准ズ、

一 塔召物、小寄合にも、猥の作法在之輩ハ座を立可申事、但上衆ハ請暇落ニ准ズ、

一 塔召物に式事、火の改身の清め、不沙汰なる時ハ、其日の出仕可押事、

一 弟子同宿我儘にほうし致バ、其學文所坊主ハ可改事、但總檢校無違亂於請取、過失請暇ニ准ズ、

一 當道藝する時の作法破らバ、同宿たらバ一禮申べし、高官の人にハ裝束可拔事、

一 官位の爲諸旦那ハ得勸進を出世せざる輩、可行死科事、

此外之科は時々評議次第可申付者也、

寛永十一年三月五日

職 小池檢校凡一 二老 天野檢校 祐一

三老 小寺檢校温一 木村檢校 良一

村田檢校甚一 波多野檢校孝一

座中取締役

〔評定代官盲人并諸取計等之類〕寛政三亥年七月廿三日、松平越中守殿御渡之由、寺社奉行松平右京亮殿より來ル、

寺社奉行 江

藤植檢校

塙 檢校

右座中取締役可相勤旨、可被申渡候、

兩檢校 江 可相達旨申聞、總録 江 可被相渡事、

藤植檢校

塙 檢校